

岡崎義恵著作選集

日本古典の美

宝文館出版

昭和四十八年八月十日 第一刷発行

日本古典の美

定価 2000 円

著者

岡崎義恵

発行者

羽生和夫

印刷者

青木武夫

発行所

宝文館出版株式会社

東京都千代田区神田神保町三ノ一七

振替東京二八〇番

3-3-91・001049・7715

序

本書に収載した論考は、極めて多年にわたって作られたもので、古くは大正七年六月、私が大学を出た翌年、「帝国文学」の編集者から依頼されて、私としては初めて雑誌に寄稿した「芭蕉と良寛」に始まり、降っては一昨年起稿した「世阿弥の能論」に至るまで、実に五十余年間の執筆にかかるものである。その間、昭和二年、東北大学教授の諸先輩に伍して、雑誌「思想」の特集「日本文化」に寄稿した「正徹」（本書では「正徹の様式」）とか、また昭和四十年、日本学士院会員の列に加わることになり、その総会で発表した「源氏物語の宗教的精神」（本書では「源氏物語における仏教の位置」など、私の生涯において思い出の深い労作も、本書の一部をなすこととなった。

本書に収めたこれらの論稿は、すべて日本古典の芸術的価値を明らかにするため起稿したものであるが、中には雑誌や講座などの出題に応じたものもあり、また全く自己の発案によって書いたものもあって、その動機は様でない。しかし、それらの動機を推測することは、読者には不可能であろうし、またその必要もあまりないように思われる。私は他からの依頼による執筆でも、多くは自己の要

求にひき直して考察を進めているからである。それにしても、本書の論者がすべて私の学術的な体系や理論から出発して、統一的に研究を行なったというものではなく、いわば環境からの要望と、自己の内部から出た要請との結合から成ったものであることは否まれないであろう。それは私にとって有利にも、また不利にもなっているかと思う。

本書収載の論稿は、一部分は雑誌などに載せたことのあるもので、まだ単行本にはなっていないものであり、一部分は一度単行本に収めたことはあっても、今は絶版になっているため、容易には入手し難いものである。本書では比較的前者が多量になっているように思う。これらの事情は、巻末の「本書収載論文」と題する記録によって悉しく知られるであらう。

そしてこれらの論稿は、本書の体裁を整えるため、初出の状態と較べると、かなり加筆してあり、中には著しく原形を崩したものもある。「本書収載論文」の中で、そのことは一応ことわってあるが、ことわりのないものも部分的には加筆のあることが多い。特に戦前の執筆にかかるものは、すべて新かなづかい、新字体に改めてあるし、文体も今日から見ると古めかしく思われる点は書き改めてある。その点で「古事記の国しのひ歌」や「正徹の様式」などは、原形に親しみのある人には、もとのままがよいようにも思われたいとは限らない。

本書の題名には「日本古典の美」という語を用いたが、もと本書はこのような主題のもとに企画したのではないので、各稿に「美」というイデーが貫いているとはいえない。しかし私は美的、芸術

的価値以外のものを古典の中に求める気持ちはないのである。それゆえ、たとえば「源氏物語」の宗教的精神を論題とした場合でも、それが「あはれ」という美的価値に参与する姿を見ることが目的であり、芭蕉の自然観を論じて、その科学的自然観を捉えようとしたのではなく、やはり詩人として自然に対した態度を究めるのが目的であった。「古事記の国しのひ歌」も倭建命の倫理的感情の究明というよりは、臨終の少年英雄の心情を、美として見ようとしたものであり、世阿弥の禅の思想にしても、その能論が宗教的立場か美的立場かを批判しようとしたものである。ただ、書名からいうと、日本古典の美の特性なり普遍性なりを、主題として追窮することが忘れられているように思われるであらう。しかし、それは別に「美の伝統」や「風流の思想」の如き著書に譲ってあることを諒承して貰いたいと思うのである。

なお本書の論稿は一度にまとめて書いたものではないから、処々重複する記述が見いだされるであらう。特に「源氏物語の求道心」や「日記文芸とその周辺」などは、他の類似の稿と重なる部分が多いが、全部を削除するとしては吝まれる部分もあって、重ねて収録した。また本書にはなお収録しておきたく思う稿も少なくなかったが、頁数の多くなることを思い、読者の閲読の負担になることも考へ、私としては遺憾の情をもって割愛した。たとえば、かつて「古代日本の文芸」に収めたことのある「古事記における男性的精神と女性的精神」「祝詞・記・紀・風土記の季節表現」「万葉以前の詠物」や、「風流の思想」の中の諸章などである。これら復刊の機会を得ない諸論考は、やはり旧著の

中にその生命を保っていると考えるほかはないのである。

昭和四十八年四月

岡崎義恵

目次

序	一
古事記の国しのひ歌	三
万葉集の美	六
一 青春の抒情	六
二 「あはれ」の美の確立	九
歌物語としての伊勢物語	一七
源氏物語の様式	二二
源氏物語の宗教的精神	二九
一 本居宣長の「物のあはれ」説と宗教的精神	三六
二 「源氏物語」における仏教の位置	三七

三 「源氏物語」の求道心―光源氏と浮舟……………	三三
--------------------------	----

古代日記の考察……………	一三三
--------------	-----

、一日記文芸とその周辺……………	一三三
------------------	-----

二 平安朝女流日記の美意識……………	一四四
--------------------	-----

三 日記における事実と虚構……………	一六九
--------------------	-----

*

俊成・西行・定家……………	一八三
---------------	-----

一 俊成と西行……………	一八三
--------------	-----

二 定家論……………	一九七
------------	-----

徒然草の美……………	二三三
------------	-----

一 「徒然草」と「枕草子」との比較……………	二三三
------------------------	-----

二 「徒然草」の様式……………	二三四
-----------------	-----

軍記物の文芸的性格……………	二三一
----------------	-----

文芸としての謡曲	二五〇
世阿弥の能論	二六三
一 世阿弥の能論と歌道との関係	二六三
二 世阿弥と禅の思想	二九五
正徹の様式	三八

*

元禄歌舞伎の世界構造	三六七
西鶴に関する二章	三九三
一 西鶴の風流思想	三九三
二 西鶴と馬琴―叙事文芸における位置	四〇四
芭蕉に関する五章	四二七
一 芭蕉の精神	四二七
二 芭蕉の自然観	四三九
三 猿蓑	四四八

四	芭蕉の俳論と世阿弥の能論	四六一
五	芭蕉と良寛	四六六
	本書収載論文	四八三

日本古典の美

古事記の国しのひ歌

「古事記」中巻、倭建命が征戦の途上能煩野のほにおいて薨ずる条は、次の如く四首の歌をもって描き出されている。

そこより幸行いまして能煩野に到りませる時に、国思しはして歌ひたまひしく、

大和は国のまほろば

たたなづく 青垣

山隠かくれる 大和しうるはし。

また歌ひたまひしく、

命の 全けむ人は

疊薦たたき 平群の山の

熊白檜くまかしが葉を

髻華うずに挿せ その子。

この歌は思国歌なり。また歌ひたまひしく、

はしけやし 吾家の方よ

雲居起ち来も。

こは片歌なり。この時御病甚急になりぬ。ここに御歌よみしたまひしく、

嬢子の床の辺に

我が置きし つるきの太刀

その太刀はや。

歌ひ竟へて、即ち崩りましき。

「日本書紀」を見ると、この部分は全く叙述を異にし、一首の歌もなく、国家的使命に殉ずる英雄の心情を嚴肅に叙してある。

しかし、「古事記」に出ている歌の中、始めの三首は、「日本書紀」にも同じく景行天皇の巻に出ているのであるが、それは天皇の御製となっていて、次の如く書かれている。

十七年春三月、戊戌の朔にして己酉の日、子湯の県に幸して丹波の小野に遊び給ひき。時に東の方を望み給ひて左右に謂り給ひしく、「是の国は直に日の出づる方に向けり」と宣り給ひき。故其の国を号けて日向と曰ふ。是の日、野中の大石に陟りて、京都を憶ひて歌よみしたまひしく、

愛しきよし 我家の方ゆ

雲居立ち来も。

大和は国のまほらま

暁づく 青垣

山籠れる 倭しうるはし。

命の 全けむ人は

暁薦 平群の山の

白櫃が枝を 髻華に挿せ

この子。

是は思邦歌と謂ふ。

このように「記」「紀」所伝を異にするのであって、いずれを正しいとすべきかは容易に決し難いことであるが、とにかく「記」「紀」共に「くにしのひうた」なるものを伝えているのであるから、これがいかなる内容を持ち、いかに解釈され得るかということを考えて見たいと思う。これは、一つにはこのような所伝の相違について学術的研究を加えることの興味と、一つには「くにしのひうた」というが如き国民精神の源泉を窺わせるに足るような名称が、何を意味するのであるかということ、思念する興味とを誘うためであるが、しかし私がここにこれを取り扱う最大の興味は、この歌の文芸的価値が上代歌謡を通じて第一位を占めるに足るものと思われるゆえに、どうしてそうかという理由

を考察しようとすることに存するのである。

この「くにしのひうた」を解釈するには、「記」によるか「紀」によるかのほかに、今一つこれらの所伝を離れて、伝説に関係のない民謡風の歌として、独立に観る立場がある。便宜上まず最後の立場から考えて行こうと思う。

「記」「紀」「万葉」の歌を民謡として考えることはこのころ盛に行なわれている態度であるが、それによって考えると、これらの歌は国見の歌の如くにも思われ、またそうでなくても、大和の国の初夏の行楽と、それに伴う讚美の情とを内容とするものの如く思われる。「大和は国のまほろば」の一首は、大和においてその住民が自分等の国土の美を讃えるものとして、いかにも自然である。しかし「命の全けむ人は」の一首は、果してそう見得るであらうか。第一、「命の全けむ人」という言葉が落ち着かない。これは命のなくなろうとする人が、健康な人を指していうべき語であるから、大和の民が自分達を指してそういうのはおかしいのである。もっとも老いぼれや病人ならばいざ知らず、元気な者は楽しく遊ぶという意かとも考えられるが、それにしては、やはりこの語は大げさで、しっくりしないのである。或るいは死人を葬った後で遊宴でもすることかと思われるが、それにしても、「全けむ」という想像の心持が十分適合しない。それゆえ、これはやはり死に臨んだ人が、自己の死後生き残るであらう人を指して言ったものと見るのが最も自然である。「その子」という語もまたこれに相応ずる。そこで、これは一般民謡ではなく、何かの伝説に付随したものと見る方が適切である。